

住信為替ニュース

THE SUMITOMO TRUST & BANKING CO., LTD FX NEWS

第1875号 2007年05月14日(月)

《 another top change for the European country 》

先週の1874号 (<http://www.ycaster.com/news/070507.pdf>) でフランスの次の大統領ニコラ・サルコジ氏について書いたばかりだと思ったら、今週はイギリスの首相を10年も務めたブレア首相(54才)の退任の話です。イギリスの次の首相はまだ決まっていない。かつブレア首相は6月のサミットにも出るし、アメリカやその他の国も訪問する。しかし彼は6月27日には英労働党の党首を、そしてイギリスの首相を退任する。次のイギリスの首相には、ブレア首相の下で財務相を長く務めたゴードン・ブラウン氏(56才)の就任が確実視されている。

一口で「10年」というが、これは政治家のトップ維持の長さとしては驚異的である。なによりも、アメリカの大統領は絶対出来ない。2期8年以上は禁じられているからだ。では議員内閣制が敷かれている国ではどうか。少なくとも私が調べた範囲では、日本で最も長く首相を務めたのは佐藤栄作首相で、在任期間は約7年と8ヶ月。日本のその後の首相は総じて短期で、小泉首相が5年と約5ヶ月を務めるまでは中曽根首相の時期のような多少の例外もあるが「年代わり」とも言える状況だった。43才の若さで首相になり(労働党の党首になったのは40才そこそこ)10年も首相になったというのは、イギリスの首相が日本の首相よりはるかに長期政権になりがちであることを考慮に入れても、ブレアが秀逸なトップであったことを物語っている。

ブレア首相が長く首相の座を保てたのには、次のような理由があったと思われる。

1. 老大国イギリスにおいて、実年齢の若さとそのアイデアの斬新さが国民の心を捉え、世界でもその若さで注目を集め、イギリスの「自慢の首相」となった
2. 労働党をそれまでの「労働組合の政党」から、「国民の政党」に変身させ、保守党より遙かに国民に人気のある政党とすることに成功した。つまり、まずは党内改革の成功者だった
3. そしてイギリスを「第三の道」に導いたこと。それは労働党の綱領から生産手段と輸送の国有化を削除し、経済政策を自由市場経済に転換するという。と同時に、保守党の荒々しい市場経済主義ともひと味違う「やさしい社会」を目指したこと
4. イギリス経済のサッチャー、メジャーと続いた保守党政権の跡を受けて活性化しつつあったイギリス経済は繁栄期を迎え、ブレア政権の10年間の期間中イギリス経

済にかつての「暗さ」はなくなり、国民は繁栄を謳歌した

ことだったように思う。ブレアの10年はまた、通貨面から言うと「英ポンドの復権の10年」だった。90年代の半ばに私の記憶では1ポンド=150円弱というポンド安まで行ったポンドは、その後は回復基調に乗り、今では240円に届こうとしている。

第二次世界大戦後のポンド・円相場には、私がうる覚えに覚えているだけで1200円台だとか、1000飛び台があったことを考えれば、今のポンド相場は「まだポンド安」と言えるかも知れないが、それでも安値からのリカバーは今から思えば実に印象的だったし、なおかつ世界最高の短期金利水準（5.5%）を持つ国として、安定感は抜群である。今の世界では、日本のように景気回復が続いてもデフレの恐怖から脱することが出来ない国もある。かつての世界中の通常金利水準とも言える5%台の短期金利を持つ国は、世界から資金を集める国でもある。

国内的にはかなりうまくいっていたブレア政権が躓いたのは、外国政策、特にアメリカのブッシュ政権との距離の取り方の過ちである。「フセイン政権は、45分で生物・化学兵器を動員できる」と国民に説明して、対イラク（フセイン）戦争でイギリスをアメリカの密接な協力国とした。このブレアの姿勢で、「結局本当にアメリカの味方になってくれるのはイギリスだけ」というアメリカ・サイドの信頼は高まったが、戦争の長期化はイギリス国民の離反をもたらした。特に打撃だったのは、ブレア政権が対イラク戦争協力において世論操作とも思えることをしたことが明らかになったこと。「45分云々」もあとで世論誘導だったことが明らかになった。

ブッシュ政権の対イラク戦争遂行に対する疑念、不信がアメリカでも高まり、ブッシュ政権の支持率が下がるより以前にブレア政権の人気は下がり、2009年にも予想される総選挙で労働党が政権を維持するためにはブレア首相が辞任するより道がなくなって、ついに首相も後任に道を譲ることになった、というのが経緯である。

《 I did what I thought was right 》

ブレア首相の地元選挙区での退任表明演説は、イギリス国民ではない私が聞いても、記憶に残る、感情のこもった名演説だったと思う。「正直な人だった」という印象を改めて残した。このところずっとブレア批判を強めていたロンドンの新聞も、「それは感動的なものだった」と論評した。私が気に入ったところは

「I ask you to accept one thing. Hand on heart, I did what I thought was right. I may have been wrong. That 's your call. But believe one thing: I did what I thought was right for our country.

「This is the greatest nation on earth. It has been an honor to serve it. I give

my thanks to you, the British people, for the times I have succeeded, and my apologies to you for the times I have fallen short.」

の二つです。いいじゃないですか。間違っていたかも知れないが、「この国にとって正しいと思うことをした」と言い切った。なかなか言えません。首相として出てきた時の鮮烈さを思い起こしました。確か首相になってから最後のお子さんが出来た。「my apologies to you for the times I have fallen short」(至らなかった時に対する陳謝、反省)を口にしたのも好感が持てる。

後任はほぼ確実に労働党内にあってブレアの一貫した政敵だったブラウン財務相で、ブレア首相よりも年上の首相(56才)になる。ブラウン新首相は党内での人気はブレアと二分するが、国民的人気はブレアより遙かに低い。気さくで誰とでも話が出来たブレアと違って、ブラウンは「知性の固まり」と言われて一般的にはとっつきにくく、イギリス国民には親しみを持ってない人が多いようで、人気がない。だからイギリスのテレビを見てると、「ブレアは人気は聚落して首相の座を降りるが、2~3年もしたら、あのブレアはどこに行ったという声起きるかも知れない」といった指摘もある。あと2年後でもブレアは56才であって、日本の首相の多くが首相就任した年よりも若い。そういう意味では、再登板の可能性はなきにしもあらず。

ブラウン財務相は、長年ブレア首相の下で閣僚をしており、党内では政敵だったが内閣では言ってみれば片腕だった。政策は内外ともに変わらないとみられる。しかし違うのは印象だ。ブレアが出てきたときには鮮烈な、そして若い首相という印象だったし、ブレアは労働党を人気政党にした立役者で、保守党から政権を奪った人物だったが、ブラウン蔵相に「改革者」のイメージはしない。

ゴードン・ブラウンが首相になったからといって、イギリスが直面している問題の深さは変わらない。イラク政策の見直し、アメリカとの関係見直し、イラクからの撤退をどうするのか。そしてEUとの関係の立て直し。私が注目するのは、ドイツでメルケル政権が出来たのが去年であり、今年はこの時期になって相次いでフランスでシラク大統領が代わり、イギリスでブレア首相が替わったことだ。つまり、ヨーロッパ主要国の顔が全部変わった。

シラクにしるコールにしる、「自分が率いた欧州」、具体的にはEUやユーロに対する思い入れは非常に強かったに違いない。ブラウンは今まではそれを横目で見ながら、イギリスという老大国の舵取りをしてきた。ブラウン、サルコジ、メルケルの英仏独の新トップ3人が、どのようなハーモニーを、そして不協和音を奏でるかはまだ分からない。

私には、「ブラウンは何をするのか」ということ以上に、この3人の関係がヨーロッパをどう形作っていくのかに興味がある。さらにはこの3人が、対米、対日、対中関係をどう築くのか。正直言って、あまりよく分からない。何せサルコジの路線が見えない。予想外の事をする人ですから。サルコジは外交には殆ど実績がない。為替市場も、この三人の力学の展開が見えないうちは相場をどう動かして良いのか分からないようで、ユーロ相場やポンド

相場は、基本は様子見、レンジ取引を続けている。

それにしてもイギリスのテレビは気が早く、「ブレアはまだ若い。今後彼は何をするか」といった話題が挙がっていた。

「党内の支持がないのでクリントンにはなれない」

「ゴアと一緒に環境問題への取り組みをするのではないか」

といった話をする人も出ていた。他の政策ではブッシュ支持のブレアだったが、確かに環境問題への関心はひととき高かったし、この面ではブッシュ政権と異なる立場を取った。「ゴアブレア」。確かに強烈なタッグだが、ブッシュ政権が関心を強めるなど世界の関心項目の前面に「環境問題」が登場してきたこの時期に、この二人が「脇役」というのもちょっと残念な気がする。

《 some hesitation for further lower yen 》

一方アメリカの動きで筆者が先週気になったのは、米下院で開かれた「為替操作が米国の企業と労働者に及ぼす影響」と題した公聴会で、中国の人民元と並んで日本の円もやり玉に挙げられたことだ。

こうした声は今までもあった。しかしブッシュ政権が極めて親日的であり、対イラク戦争での協力においても日本が出来る限りの協力をしているという評価が高かった故に、矛先はもっぱら中国に向いていた。しかし私の見方では潮目は変わりつつある。

第一に、次期アメリカ政権は民主党政権になる可能性が強まっている。民主党政権は以前から「円安」に対して厳しい。かつ実際に日本の円は日本人でもしばしば驚くほど安くなっている。特に欧州やオセアニア通貨に対して安い。アメリカの自動車メーカーでさえも最近では、「アメリカの自動車産業が国内市場でさえも勝てなくなっているのは日本が為替相場を操作しているためだ」などとは言わないが、政治の世界ではこのロジックは他の問題との関連において通用しうる。例えば慰安婦問題などでも米議会は対日攻勢を強めている。いろいろな問題がからんでいるのである。

この公聴会では、「不当な円安が日本の自動車産業の隆盛につながっている」との認識が数多くの議員から出され、「円安の是正を促すべきだ」との声が続出したという。間違っているが、政治のパワーにはなりうる。

今までは対中だけだったが、為替政策を巡っては対日強硬論もじわりと増してきている。日本の新聞報道によれば、公聴会で議長を務めた民主党のレビン議員は、「中国政府が管理している人民元と違い円には政府の市場介入がない」ことを指摘しながらも、「通貨が安くなって、結果的に当該国の輸出業者が有利になっている」という「中国と同じ問題」が日本でも起きているとして円安に不満を表明した。そのうえで「政府の次の手だけでなく、立法の次の手も検討する必要がある」とも語った。

民主党のディンゲル議員は、「政府が円を人為的に低く抑えるため日本政府は口先介入に
関与してきた」との見解を示した。その他の議員も雇用や米経済への懸念を相次いで示し
たという。間違いだが、無視できない動きである。

対ドルでは円安はそれほど進んでいないのだが、実際に円相場はその他の国の高金利通
貨に対してはかなり円安が進行している。先週少し調べてみたのですが、240円のポンド、
100円の豪ドル、90円のニュージーは相当久しぶりの(約10年ぶりの)外貨高・円
安です。また163円のユーロは2000年だけに88円台があったことを考えると、「か
なりの所まで来た」と言えなくもない。

非常に長いチャートを見ていると、それこそ先に触れたポンドの話ではないが、凄い円安
レベルが歴史的事実としてある。だから「240円のポンド、100円の豪ドル、90円の
ニュージーのどこに問題があるのか」と問われれば、「それはないかもしれない」と言うし
かない。しかし、ビッグマック・パリティーではないが、単純に比較できるものを比べてみて
「相当な円安だな」と思うことは確かである。私の印象だけだが、この連休中は本当に東京
のホテルなどでも英語以外の外国語が耳に入ってきた。隣の韓国の言葉は言うに及ばず、中
国、欧州各国の言葉、そして目新しいところではロシア語。ロシアの人達は大学してきてい
る印象だった。ロシアでの日本ブームもあるのでしょうか、全般に言えることは「円安で日
本が安くなった」ということでしょう。

オーストラリアの投資家が、雪質の良い長野県の白馬の土地を買っているというのも最
近報じられている。「円は安すぎではないのか」というのは我々の実感であると同時に、市
場でも「これ以上の円安への逡巡」が感じられる。つまり、先に指摘したようなレベルに対
する逡巡故に、このところ「勢いの良い円安の時期」は終わり、「更なる円安への逡巡」が
見られると筆者は思う。

といっても、「では大幅な円高になるのか」というと、そういう感じはない。なにせ非常
に大きな金利差がある。しかしいろいろな面から、「円安のペースが鈍ってもおかしくない
レベル」に来ていることは確かだ。結果どうなるかということ、今後は時に大きな円高への修
正が起きてもおかしくない状況である、と筆者は考える。円安にさらに行くには勇気がいる。
先週金曜日にも円相場は全般的に円高に動いた。もっとも、その後ロンドン、ニューヨーク
でまたかなり円安に動きましたが、しばらくは、そのような展開になるかもしれない。

今週の主な予定は以下の通り。

5月14日(月)

5月15日(火)

4月国内企業物価

3月機械受注・4~6月見通し

決算発表ピーク

米4月消費者物価指数

米5月NY連銀製造業景気指数

5月16日(水)	米5月NAHB住宅市場指数 3月鉱工業生産(改定値)・設備稼働率 4月消費者態度指数 日銀政策決定会合(～17日) 米MBA住宅ローン申請指数 米4月住宅着工 米4月建設許可件数 米4月鉱工業生産・設備稼働率 コーン米FRB副議長スピーチ 英中銀インフレ報告
5月17日(木)	1～3月GDP(速報) 4月首都圏マンション販売 福井日銀総裁記者会見 日銀金融経済月報 米4月コンファレンスボード景気先行指標総合指数 米5月フィラデルフィア連銀指数 4月北米半導体製造装置BBレシオ バーナンキ米FRB議長講演 シカゴ連銀総裁スピーチ サミット財務相会合(～18日)
5月18日(金)	3月第3次産業活動指数 3月景気動向指数(改定値) 米5月ミシガン大学消費者信頼感指数(速報)

日米ともに景気は踊り場、または中だるみの気配。先週末のアメリカ市場の株価が前日の大幅安から戻ったのは、「利下げ期待の再台頭」があったから。その面で、日米の経済指標の動きには注意が必要だ。この週末でやや気になったのは、日本の消費者物価の下落が長く続くと見ている人の増加でしょうか。上がっているものもあるが、下がっているものの下げペースが速いことも確か。これが物価統計に影響している。

初任給も増加気味で、労働賃金レベルは若者の領域では上がってきている。これが消費に繋がるかどうかポイントでしょう。今週は指標が多い。

《 have a nice week 》

週末はいかがでしたか。徐々に夏が接近している印象がします。夏日も出てきている。しかしまだ空気は爽やか。でも今年の夏は猛暑の時期が長期に渡るという予測もある。早くも

恐ろしい印象。

それにしても、昨日は千秋楽の朝青龍と豊ノ島の相撲を見ていて、あまりにも豊ノ島が可哀想だと思ってしまいました。大阪場所で時津風部屋に伺って一緒にちゃんこを食べたので感情移入しているかも知れないが、朝青龍が初日対戦の可能性が高い豊ノ島に対して出稽古でプロレス並みの技を掛け、場所前に怪我までさせたのはフェアプレーの精神に反すると憤慨しているのです。豊ノ島はよく休場しなかった。

それもあってか、朝青龍は豊ノ島があっけなく倒れて負けたら、手を貸して起き上がるのを助けていた。普段は決していないことをしたのは、心の痛みがあったからでしょう。今の相撲界には「朝青龍には何も言えない」という雰囲気があると新聞が伝えているが、「それはおかしい」と思うし、時津風部屋が「朝青龍の出入り禁止」を打ち出したのは妥当だと思う。

それにしても、先の大阪場所の最後のあの二番はいかん。ともに体をかわしての一瞬の相撲。あれでは相撲になっていない。勝てば良いというものではない。神に捧げる取組、技であって、立ち会ったらもう相撲取りが土俵から出ていたり、土俵に倒れていても何にも面白くない。押し合ったり、組んだり、投げが出て初めて相撲だと思う。白鵬が横綱になるだけでは大相撲の人気回復にはならないような気がする。栃東は好きだったのに引退ですか。公式ブログ (<http://www.tochiazuma.jp/>) には、「どの医者からも相撲を取ることを認められなかった」とある。しょうがない。残念です。

来週から再来週の初めにかけては時差を伴う移動がありますので、このニュースも変則になる可能性があります。ご承知おきを。

それでは皆様には良い一週間を。

《当「ニュース」は住信基礎研究所首席研究員の伊藤(E-mail ycaster@gol.com)の相場見解を記したものであり、住友信託銀行の見通しとは必ずしも一致しません。本ニュースのデータは各種の情報源から入手したものです。正確性、完全性を全面的に保証するものではありません。また、作成時点で入手可能なデータに基づき経済・金融情報を提供するものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。投資に関する最終決定はお客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。》